続　宇治川夜話（相撲人国記）

黄旗亭

㈠

鈴木商店と土佐人と言えば運動は相撲と来るのは言を待たない。それ程土佐人と相撲は深い伝統に結ばれている。おぼろげな記憶のつなぎ合せで間違いだらけを承知し乍ら往時の意気軒昂たる面影を振り返って見よう。以下文中敬称を略した不遜を御許し頂き度い。

大正八年四月豪勇久琢磨が本店鉄材部に勤務する事になった。神戸高商相撲部主将、前年個人優勝という肩書が或る種の畏敬を以て迎えられた。現今の様に有名選手を引き抜くという様な風潮のない頃である。土佐人久は平凡に経済人として入店した。久に取って不運な事は彼が神戸高商を卒業した翌年から、それ迄、大阪日日新聞（今の日日ではない）関西日報共催の学生相撲大会が、毎日新聞の主催に引き継がれ新しく学生横綱制度が創設せられた事だった。大阪日日、関西日報は共に大阪の二流紙であったが天下の大毎の手に移ると俄然、熊本の司家吉田善門を担ぎ出して練絹の横綱を授与するという大ヒットを飛ばした。堺大浜の土俵は一躍全国の注視を集めた。同じ優勝でも前年とでは矢張り一寸格差があり不運と云う他はない。神戸高商はその年、後に金子直吉の女婿になった田中四郎が主将の印綬を負びて糸谷孫市、保賀喜三郎、大宰正巳（旧日本発条）、角田一雄と駒を並べて堺大浜の第一回全国学生相撲大会に出陣した。神高商は対校戦決勝で早大と覇を争い見事優勝、個人戦でも決勝で田中が僚友糸谷と決戦して制覇初代横綱を張り準優勝糸谷と無人の野を行く様な勢であった。田中四郎は眉目秀麗身の丈抜群の偉丈夫、神戸高商特待生の秀才と三拍子揃った逸材、後、久の斡旋で金子翁に嘱望される。序乍ら翌年は雪辱に燃える早大と再び相見え、主将浅岡信夫の引きいる早大勢は神高商を決勝戦で下し団体優勝、個人戦でも浅岡は田中を破りあわやと思われたが糸谷が決勝戦で浅岡を破り田中の仇を討って二代目横綱を獲得した。

黒陶　舞人（戦国時代）正木美術館蔵

㈡

さて久の入店によって土佐人国鈴木相撲部は俄に活況を呈して来た。即ち井上清は楓英吉を動かし従来の相撲部を一段と拡充、それ迄は亜米三倶楽部の土俵だけであったものに更に中山手済美寮の中庭にも新しく土俵を築き、全店に相撲熱を鼓吹した。

相撲部は歴史こそ浅いがそれ迄にも中々輝やかしい戦歴を持っている。前年の大正七年には下雅意亀吉井上清、村井順三、明神秀吉、中西徳三郎等が須磨寺池の端で開かれた兵庫県紳士相撲大会（註、当時は実業と言わず学生、紳士大会と称した）に出場、村井は準決勝で増田貿易沢田武男に敗退、決勝は下雅意と沢田の対戦となったが見事下雅意が優勝、鈴木商店相撲部の名声を県下に高めた。下雅意は元兵庫県立工業相撲部の主将、初期の本店相撲部大将として活躍、特に優れた体軀ではないが持前の斗志と下手に組んだ時のねばりは比類がない。内無双の名手で極り業は頗る華々しかった。

村井は富山商業柔道部の主将二段の腕前は何でも柔道仕込の腰投げ跳ね腰で投げ飛ばし痛快極わまる取り口を見せた。両人共、今でも須磨の土俵を語り出すと昨日の事の様に熱気を負び下雅意は身振り手振りを交えて老骨自慢の思い出話はつきるを知らない。

井上清、あだ名はブルドッグ、相撲部育ての親とも云う可き人、無類の相撲ずきで典型的な土佐っぽう、豪快な釣りを得意とし、力にまかせて相撲を取るので小兵の久には度々好餌にされていた。中山手に起居する私等見習員も度々朝稽古に狩り出され芋粥の焚き出しを振る舞われたなつかしい思出がある。古武士的な風貌の持主で親分肌の侠気から頼まれたら否と云えない性格が禍して後年自ら窮境を招き夭逝された。終生いが栗頭で通し筆者も鉄の困窮時代一方ならぬ世話になった。惜しみても尚余りある人であった。

現在の久は古稀を過ぎて尚矍鑠「鼠」の中の久老人は赤ネクタイにステッキの伊達者だが往年の彼は肩巾広く逆三角型の体軀は一たん組めば土俵に根が生えた様に重い、離れては小兵を利し俊敏目の廻る様に立ち廻る。昔の講釈師の御前相撲に出て来る衝立と異名の豪傑桂市兵衛を思わせる様なタイプ、高商相撲部の田中以下は皆久の弟子格である。

㈢

久と井上に刺戟されて本店相撲部は次第に熱気を負び春秋二回には店内大会が開催され相撲を取らねば辰マンにあらずと迄云われる程盛んになった。楓さんはそんな時同じ様に裸になって土俵に上られた。色白の細い体にはマワシが大きすぎて丸でマワシが動いている様なユーモアがあった。それでも運動神経のよいオールスポーツマンの楓さんだけに中々スマートな取り口を見せてくれた。或る時、中山手の土俵へ巡業中の東京相撲の力士が招かれた事があった。恐らく楓、久、井上等の肝入りであっただろう。土佐人に取っては郷土力士の土洲山、矢筈山、それに綾川等幕内のパリパリが来た。高商の田中や久や井上等が三段目位かと思われる力士と稽古をしているがてんで歯が立たない、我等の英雄も三ツ子同然で余りの力量差に唖然としたが小兵の力士というのは強い筈当時小結の紅葉川であったので二度びっくり。プロとアマとではこんなにも違うものかと思わされた。

㈣

ともあれ、こうした恵まれた環境の中から、県下中等学校学生相撲界に君臨した三木秀次、後に東海の麒麟児とうたわれた竹下富士松が県立商業選手として。沼田三郎、森川泰は神港商業選手として各々頭角を現わして来た。三木は兵庫県の産。早くから飾磨の小天狗と称され出藍の誉が高かった。昭和十一年に県下中学の部に優勝、堺大浜の全国大会には中学の部で二度準優勝したが遂に横綱を獲得するに到らず万哭の涙を呑んだ。その相撲振りは重厚にして果敢特に四ツ身になってからの「ひねり業」は神技に近かった。上脊のある方ではないが四ツ相撲の盛んな頃で組手が多く三木につかまると一瞬の内にすかされたり合掌ひねりの大業に見事な切れ味を見せた。

同じ県商の竹下は十二年県下大会に優勝、県商相撲部の名誉を保持した。脇の堅い鋼の様な体で絶対に内懐に入り込ませず相手をはじき飛ばしてしまう。その彼も盧項漸く疎になったが中々往年の麒麟は駑馬に成り下らず未だに禿頭から湯気を立てて、若い人達に「一丁こい」とやるんだから恐れ入る。森川はでっぷり型、沼田は身長六尺に近く何れも久の薫陶を受けていた。本店のレギュラー明神秀吉はやぐらの名手ぴょんぴょん跳ね廻る様な相撲で中々組まぬが組んだら最後す早く内股へ割り込んで釣り上げる様に矢倉に振る。も一人の中西徳三郎は色あく迄黒く肉附き豊に丸っこい体は弾力的で何番稽古をしても疲れる所をしらない。毎晩岩屋の日沙商会から土俵に来て最後迄頑張っていた。稽古好きな事この人の各に出る者がない。その中西も今は亡い。相撲人列伝中の人々も、早半数に近く供養塔同人になった。痛恨極わまりがない。されば共、辰相撲部の残したファイティングスピリットは辰魂の大きな要素として永劫に消える事はないであろう。鈴木商店の家風！敢えて家風と云う、社則でも店是でもない。鈴木の家風は今も辰巳会に脈々と波打っている。その波長の一つ、相撲部の大いなる足蹟を称える。

鳥取市民芸協会蔵・石仏

都落ち　柳田義一

月光を掩ひ冠せり　蝕ばみて
満月へ雲の峰かゝり　邪魔立てす
風知らぬ紅葉驕りて　都落ち
秋の女身幅の合わぬ　袷着て
霜柱崩れし跡を　踏み鳴らす